

御挨拶回りをし、日通会社に復職願いを出すと、人員整理で不採用となりました。しかし、倉敷レーヨン（クラレ）は翌日から入社せよでした。西条工場でクレーンの運転手として働かせていただきました。五十年の平和、素晴らしき尊い平和日本、私も文字通りの喜寿を迎え喜んでいきます。合掌。

昭和二十年徴集兵の

中支での軍務

岐阜県 都 竹 義 之

私は大正十四（一九三五）年十一月二十三日、岐阜県国府町で生まれました。私の家庭は当時、父六十五歳、母六十歳、姉は十五歳も年上で他家に嫁いで子供も三人いました。

戦況はだんだんと悪化し、内地への空襲も激化し、マリアナ諸島も玉砕、我々青年はこのまま座視しておれない心境でした。

大正十三年生まれの昭和十九年徴集兵の後に、我々大正十四年生まれの二十年徴集者も、昭和十九年七月（満二十歳と同時に）検査を受けました。当時私の体重は四〇キロしかなかったのですが、時局柄か、第一乙種合格ということで見役入営と決定をしたのでした。

昭和十九（一九四四）年十二月五日、中部第四部隊第七十三師団歩兵第九十六連隊（通称号、怒第一四三〇三）岐阜に入営しました。この部隊は、終戦時には浜松方面で本土防衛をしていましたが、私の入営は仮入隊であり、直ちに支那派遣軍第十三軍（登）隷下であり、上海方面警備、防衛の独立歩兵第六旅団、独立歩兵第二百十一大隊へ転属となりました。

出発の三日前に、岐阜連隊の将校及び現地から迎えに来られた将校により軍装検査がありました。その後、第九十六連隊長中島大佐が馬上より、関兵・出陣式がありました。また、被服も岐阜連隊の下士官・兵は綿服でしたが、我々は昭和十三年製の外套、襦袢、袴下も毛糸編みと、普通衣服一切はラシヤの新品

が支給されました（昭和十三年製軍服に「新品」があるのには驚いた）。これでは、きつと満州方面か寒い所に派遣だろうと思いました。

大隊長は、北村少佐（後中佐）で十二月九日、内地を出発し征途についたのです。深夜、岐阜連隊全將兵の万歳万歳の嵐の中をくぐり抜け、営門を出て岐阜連隊の喇叭手八人の吹奏で行進する。沿道には道狭しと見送りの市民で、駅まで二キロの間も、万歳万歳と歓呼の嵐でいっぱいでした。

星一つの新兵が、十五、六人を一個分隊として、そのうち一人が九九式歩兵銃と弾丸三十発を支給されました。私もその一人で、歓呼にこたえて手を振って行進し、岐阜駅へ着いた時は一時半になっていました。

駅到着で「大休止」。岐阜市婦人会の心ある湯茶の接待を受けました。「乗車準備」の号令がかかり、私は分隊員をまとめました。四十歳ぐらいの丸顔の婦人が「若い兵隊さん、歳はいくつ」と尋ねるので、私は「十九歳です」と答えると「まあ若いのね、私にも十九歳の娘が居ます。お国の為に頑張ってください」と

言って目を伏せ、下を向いて目頭を手で押さえています。私の推測ですが、今の若い兵隊を送り出す寸前で「このうち何人の兵隊が帰還出来るのか」と憶測し「紅顔の青年というより、紅顔の少年」ということで涙を流されていたのでしょう。

「順次乗車せよ」という命令により車中の人となる。軍用列車は静かに動き出しました。「万歳」の嵐の中、岐阜駅を後に征途につきました。私は、軍人としての幸せを、この時ほど思ったことはありません。

内地門司港から、朝鮮釜山までは輸送船、鉄道にて朝鮮半島を北上、鴨緑江を渡河し、山海関で滿支国境を通過し、いよいよ中国大陸へ、北支より津浦線で揚子江北岸に至り、対岸の南京着。聞くところによりますと、本来なら内地より、揚子江や上海、更に通航し南京という経路であったそうですが、日本近海、黄海、東シナ海には敵潜水艦が出没し極めて危険であるので、陸路南京であったとのことでした。

南京からは鉄道で安徽省蕪湖着、それから行軍で、安徽省蕪為警備地区（第三中隊警備区）元百十六

師団（京都、嵐兵団）司令部跡の洋風建物に入りました。そこでようやく昭和二十年正月四日から、初年兵としての本格的な教育を受けたのです。

その期間の教育は、警備を兼ねてのものです。揚子江畔の安徽省も本来なら平穏な地域のように思われますが、共産軍も新四軍が居り、国民政府蔣介石軍も連合軍との連繫をとって攻勢に出ようとしている時ゆえ、緊張の連続でした。また、米軍機による空襲も時々ありました。

その教育期間中に、異例とも言える、多田旅団長閣下の閲兵を二回受けました。多田保少将は中将に昇進し、内地久留米第十八師団の留守師団、第二百十二師団長に栄転されました。後任には、東京東部軍司令部より門脇大佐（後に少将）が着任されました。参考までに申しますが、独立歩兵第六旅団（肇第七三五一部隊）の独立歩兵第二百大隊は、第十三軍護衛の直轄部隊として上海に駐屯しており、私の入隊した独立歩兵第二百十一大隊は近衛歩兵第三連隊または近衛歩兵第七連隊（東部八部隊）出身者で編成されています。

た。

私の内地からの添付身上明細書は、終戦後人事係の方から知らされたのですが、国府村（町）の青年副団長歴になっていたし、青年学校の成績も優等生になっていました。これらを身上書に記入してくれた村（町）当局、青年学校に対し感謝した次第です。また、多田旅団長も、第三中隊の初年兵を見たいと、次級副官を連れて来られ、初年兵である私の手を握ってくださいました。

教育後は、安徽省の揚子江岸上流から九江下流蕪湖までの警備に任じていました。私の大隊は、昭和十九年十一月三十一日、安徽省蕪湖において編成が完了され、部隊長は赤羽茂市陸軍少佐であり、一般歩兵は五個中隊、歩兵砲隊、通信で編成されていました。

しかしながら、私が勇躍として内地出發し、教育を終え、警備、時には戦闘に参加していたのに、昭和二十年八月十五日、日本の無条件降伏となったのですが、まったく狐に化かされたようで本気には出来なかつたのですが、終戦の大詔は渙発されたのでした。

心半ばにして矛を収めなければならず、何か、おめおめと故郷へは帰れない気持ちでした。

昭和二十年十月二十二日、銅陵県大通に集結を命ぜられ、十一月十四日、武装解除となり、集中営生活をしながら、翌二十一年二月十五日、内地帰還のため大通出發、二十二日、上海に到着し、呉淞第三兵舎にあつて乗船準備。身体検査というより、伝染病（特にコレラ菌）の検便をしたり、所持品の検査等々、案外慌ただしい日時を過ごしました。

三月十八日、米軍のLST「QO三九号」船に乗船し出帆。同月二十二日、博多港上陸。直ちに復員式を挙行し除隊し復員しました。その数は一千人を超していましたが、入院中のため同行出来なかつた者は四十人といわれ、生死不明者もその時十余人あつたと聞きました。

博多から岐阜県の飛騨への旅は随分長かつたように感じました。家で家族との再会は感激でした。そして国府での第二の人生が始まりました。

支那大陸戦線で

九死に一生を得る

愛知県 植 田 信 夫

私は、大正十一（一九二二）年六月八日、愛知県海部郡佐織町に長男として生まれ、昭和十七年度の兵隊検査で甲種合格でした。

私の軍歴は次の通りです。

昭和十八（一九四三）年四月一日 名古屋第三師団

騎兵第三連隊戦車兵として留守隊へ入営。

六月二十八日 名古屋留守隊出發、中支の本隊へ向かう。

七月二十八日 中支湖北省応山県郝家店

に駐留中の騎兵第三連隊第一中隊へ編入。

昭和十九年五月十日 湘桂作戦参加のため郝家店出